

# みどりのこえ



「みどりのこえ」  
掲載webページは  
こちらから

2026  
春号  
No. 72

発行 長野県環境保全研究所  
令和8年(2026年)3月23日

編集 長野県環境保全研究所 自然環境部(飯綱庁舎)  
〒381-0075 長野市北郷 2054-120  
TEL.026-239-1031 FAX.026-239-2929  
E-mail:kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp

美ヶ原から北アルプス(穂高連峰・槍ヶ岳～爺ヶ岳・鹿島槍ヶ岳)の眺望。  
手前に亜高山帯・草原が広がり、その間には糸魚川-静岡構造線にあたる松本盆地が見える。



## 「長野県生物多様性センター」発足にあたり

生物多様性は私たちの暮らしを支える基盤であり、その保全や多様性の増進は、国際的にも喫緊の課題となっております。世界的視点でも日本列島は最も重要な地域の一つで、生物多様性の「世界的ホットスポット」とされます。なかでも信州は、高山帯・亜高山帯といった山岳、里地・里山、草原、河川や湖沼などの多様な自然環境を有し、国内外に類のない生態系の豊かさを誇る地域です。しかしその豊かさは、人間活動や関連する気候変動の影響で確実に変化しています。

また、気候変動の影響が真っ先に出るのは「山岳」とも言われており、日本を代表する山岳県として、長野県は日本全体そして世界のためにも、生物多様性の保全に率先して取り組むべき重要な地域です。生態系の変化を正確に把握し、地域の生物多様性の衰退を食い止めるだけでなく、回復軌道へと転換すること、すなわち「ネイチャーポジティブ」へと導くことが、昨年末に開設された長野県生物多様性センターの責務であると考えております。

生物多様性に関わる様々な課題は行政だけで解決できるものではなく、多様なステークホルダーの皆様との協働は不可欠です。当センターは地域の取り組みを後押しし、県民や事業者の皆様とのハブとして多様な関係主体を繋ぎ、科学的知見を現場に届けて対話を重ねながら、皆様が主体的に参加できる環境づくりを進めて参ります。地域と行政、企業、学校、大学や研究機関、博物館や図書館等との連携を深めながら、生物多様性の増進を実現するための拠点として、「協働の輪」を拡げてゆけたらと思います。

古くから生物多様性の重要性を深く認識し、その恵み(生態系サービス)を上手に利活用してきた伝統に学び、活かし、継承しながら、「ネイチャーポジティブ」に向けた信州の新たな取り組みが、国内外のモデルケースとなるよう努めて参りたいと思います。

文・写真 東城 幸治 とうじょう こうじ  
長野県生物多様性センター長

### Contents

【巻頭言】「長野県生物多様性センター」発足にあたり (東城幸治/長野県生物多様性センター長) …	1
【特集】長野県生物多様性センターが開設されました …	2～7
【Report】自然ふれあい講座 …	8
【Report】山と自然のサイエンスカフェ@信州 …	9

長野県で開始される渡り鳥アカモズの保全 …	10
【信州気候変動適応センター通信】放置竹林と気候変動 —「ゼロカーボンミーティング in 佐久」 …	11
【お知らせ】令和8年度のイベント予定 【長野県生物多様性センター通信】 …	12



# 長野県生物多様性センターが開設されました

長野県に「生物多様性センター」が開設されました！

長野県には、私たちの行動次第で失われてしまうかもしれない、そして未来へ向けて回復させることのできる豊かな生物多様性があります。

今回の特集では、生物多様性の基本的な考え方から、私たちの暮らし・文化とのつながり、さらには地域での活用や保全の取り組みまで、基礎から応用まで幅広く紹介します。人の暮らしを支え、地域の魅力を形づくる生物多様性。それを守り、未来へ引き継ぎ、さらに豊かにしていくためには、一人ひとりがその価値を深く理解することが第一歩となります。

(黒江 美紗子／自然環境部)



## そもそも生物多様性ってなんだっけ？

生物多様性とは、単に「生きものの数が多いこと」だけを指す言葉ではありません。それは、食料や水の供給、災害の防止など、私たちの生存基盤そのものを支える巨大なシステム（生態系）の健全さを表す指標です。

私たちが日々口にする農作物は、野生種からの品種改良や、昆虫による受粉（花粉媒介者の働き）なしには成立しません。森林の土壌は雨水を蓄えて洪水を防ぎ、多様な微生物が水を浄化します。また、フクロウの羽の静音構造やハスの葉の撥水性など、生物が進化の過程で獲得した「機能」は、最新技術（バイオミメティクス）の源泉として産業にも応用されています。これら自然からの恩恵を「生態系サービス」と呼びます。

長野県の急峻な地形と複雑な気候は、多様な生態系を育み、豊かな恵みを私たちにもたらしてきました。しかし、構成要素である生きものが失われていけば、このシステムのバランスが崩れ、私たちの暮らしも脅かされます。このことは、世界中で危惧されています。生物多様性を守ることは、自然保護であると同時に、私たちの豊かで安全な生活を持

続させるための、最も合理的な投資なのです。

(高野 宏平

／自然環境部)



図：私たちの暮らしは、衣・食・住のすべてにおいて自然からの資源を得ています。PwC（2023）の分析によると、世界のGDP（国内総生産）の半分以上にあたる約55%（約8,700兆円）が、自然の恵みに支えられているとされます。自然が失われることは、私たちの経済基盤そのものが脅かされることを意味します。（WBCSD（持続可能な開発のための世界経済人会議）（2021）What does nature-positive mean for business?、Stockholm Resilience Centre、VISUALTHINKING を元に作図・和訳）





## 世界の至宝 長野県の生物多様性

日本列島はユーラシア大陸縁辺の洋上に浮かぶ島々です。きらめく海上から飛行機で近づくと、まだ陸地が見えないうちから雲の盛り上がりであのあたりとわかることがあります。海風や海流の影響を受ける湿潤な気候を、それが物語っているようです。

その島々で最大の島、本州の中央部、山脈や高原とそれらに囲まれたいくつもの水系と盆地から成る地域が、長野県です。大陸沖の大きな島の山々、その森や草原や田園や水辺が、長野県の生物多様性を形づくっています。南北に長い島の中央に位置し、標高差があるため、約 3000 種ともいわれる在来の高等植物（維管束植物）が生育しています。その豊かな生物多様性の成り立ちを見てみましょう。

海面が下がって日本が大陸とつながった氷期、寒冷で乾燥した気候の下、寒冷地の動植物が広がりました。一方、今のように海流の洗う間氷期には、温暖で湿潤な気候となり、氷期の動植物の一部は高山で生きのびました。高山植物やライチョウはそうした生きものです。

間氷期の山の斜面の上部には、オオシラビソ、シラビソなどの針葉樹、下部にはブナ、ミズナラ、コナラなどの広葉樹の森が広がりました。中でも広葉樹の森は、特に多くの鳥や獣たちの生息場所となりました。

また一部では縄文時代から火入れが始まり、高山植生とは異なる氷期由来の草原が保たれました。それら



写真 北アルプスの高山植生

の草原は歴史時代にも狩場や放牧地や採草地として維持され、秋の七草のキキョウ、オミナエシ、カワラナデシコなどの生育地となりました。そうした草原の片鱗は、今も菅平、霧ヶ峰、開田高原や各地の田畑の畔などに残っています。

世界の限られた地域にしかいない生物種（固有種）が集中し、その環境が危機に直面している地域を、生物多様性ホットスポットといいます。日本はその世界で 36 か所のうちのひとつとされ、国内では本土の山頂部と離島にホットスポットが集中しています。その意味で長野県はホットスポット中のホットスポット、世界の至宝が残された場所のひとつといえそうです。

（須賀 丈／自然環境部）



## 長野県版レッドリストからみた生物多様性ホットスポット

前掲のように、長野県はホットスポット中のホットスポットといえそうですが、では、長野県の中での生物多様性ホットスポットはどこになるのでしょうか？

世界や日本全国の生物多様性ホットスポットの検討では、固有種に着目されることが多いですが、長野県内に限った場合、長野県固有種は種数が少ないこと、また日本固有種は長野県内に分布が限られないことから、県内の生物多様性保全の優先度を考える指標として、絶滅危惧種（長野県固有種で絶滅危惧種に含まれ

るものも多くあります）のホットスポットを考えてみます。

長野県内で絶滅のおそれのある生物をまとめた長野県版レッドリスト（植物編：2014）で、絶滅危惧 IA 類（ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種）に属する維管束植物（種子植物とシダ植物）の種数分布をみると、北アルプス白馬岳周辺や中信高原（霧ヶ峰周辺）、八ヶ岳周辺などで多いことがわかります（図 1）。これらの地域は、その山域特有の高山植物



## 特集：長野県生物多様性センターが開設されました

が多く、全国的なホットスポットの分布と同様の結果です。同時に、これらの地域は、二ホンジカによる高山植物の採食が進行するなど、自然環境が危機に瀕している面からも長野県の代表的なホットスポットであると考えられます。

また、2002年と2014年のレッドリストを比較して、2014年に絶滅のおそれが増大した種（2014年版のレッドリストで新たに追加もしくはランクアップした種）に注目すると、絶滅のおそれが増大した種は、山岳域ではなく人里周辺に広くみられ、中信高原や野辺山、軽井沢の周辺などに集中する地域がみられることがわかりました（図2）。これらの地域には、半自然草原や水湿地、あるいは水田や畦畔などに生育する種が多く分布しており、2014年のレッドリストでそれら二次的な自然環境に生育する種が新規追加やカテゴリ変更されたことを反映したものと考えられます。

山岳域の高山帯のように人の手のあまり入っていない

い「原始的な自然環境」と、人の手によって形成・維持されてきた「二次的な自然環境」は、ともに生物多様性の保全上重要な環境です。長野県は、そのいずれの環境も豊富ですが、「二次的な自然環境」は、人口減少や土地利用の変化などによって、その様子が大きく変化しつつあります。例えば、二ホンジカの分布拡大に伴う過採食による植生変化が、現在、県内各地で進行しており、動植物ともに大きな影響を受けているのも、そうした変化の一つと考えられます。そのため、長野県では、第2回目となる長野県版レッドリストの改訂作業に取り組んでおり、より最近の自然環境の変化を反映した絶滅危惧種のリストアップとカテゴリの再評価を行っています。この取り組みにより、新たに絶滅のおそれが増大した種からみた長野県内の生物多様性ホットスポットが更新され、生物多様性保全の優先度の高い地域の検討につながることを期待されます。

（尾関 雅章／自然環境部）

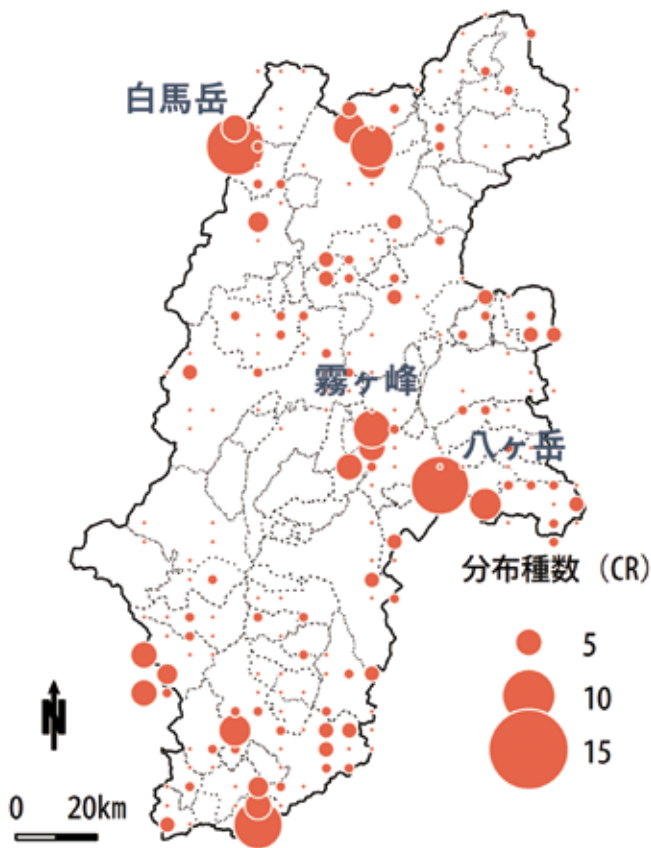


図1 維管束植物の絶滅危惧IA類の種数分布

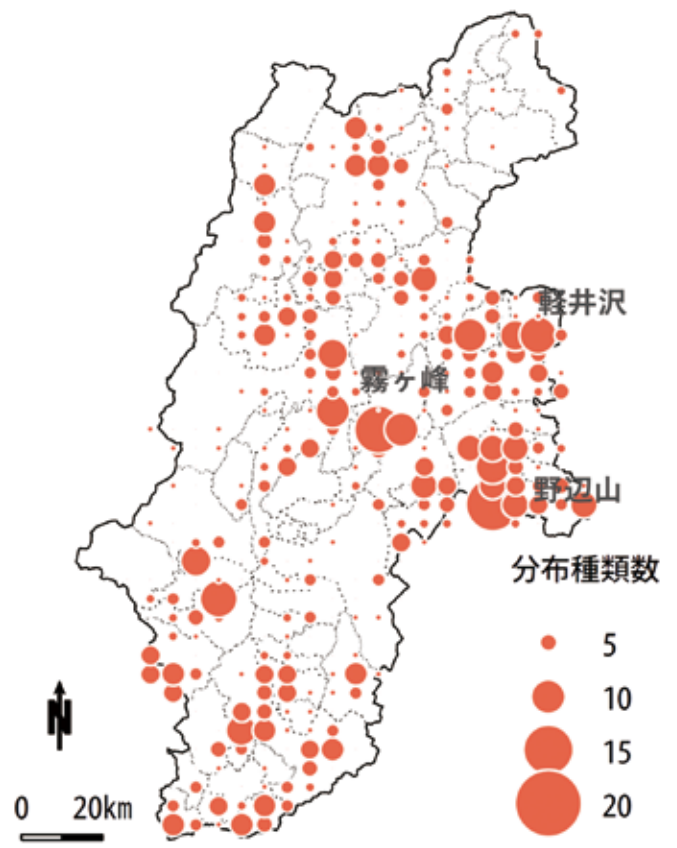


図2 レッドリスト2014年版で絶滅のおそれが増大した種の種数分布  
レッドリストの改訂（2014年）で絶滅のおそれが増大した種（新規追加・ランクアップ）の種類数を示した。



## 生物多様性の危機・私たちにできること

世界的な「生物多様性ホットスポット」である長野県ですが、今、その足元は4つの危機に直面しています。開発や乱獲による「第1の危機」、外来種や化学物質による「第3の危機」、気候変動による「第4の危機」。そして今、県内で特に深刻化しているのが、人間活動の縮小による「第2の危機」です。かつて人の手で維持されてきた里山や草原が放置され、藪化したり、ニホンジカ等の分布拡大によって植生が衰退したりしています。

県の生物多様性ポータルサイト「信州いきものがたり (<https://www.shinshu-ikimono.pref.nagano.lg.jp/>)」にもある通り、かつて広く見られた「半自然草原」は激減しました。しかし、私たちは身近な場所に、新たな希望の光を見出すことができます。それはスキー場やゴルフ場です。レジャー施設として知られるこれらの場所は、夏場に草刈りが行われることで、草原環境が維持されています。実はこれらが、失われつつある草原性の希少な動植物にとって、最後の逃げ場所（レフュージア）として機能している事例が数多く確認されているのです。

### ● 私たちにできること

**「食べる・使う」で守る** ジビエ（シカ肉等）の消費や、県産木材・農産物の利用は、適正な個体数管理や里山の維持管理（経済的な循環）に直結する保全活動です。

**新たな視点で楽しむ** スキー場やゴルフ場を訪れる際、そこを「貴重な草原生態系」として眺めてみてください。足元の花や昆虫に関心を持つことが、その場所の価値を高め、維持管理を後押しする力になります。

**正しく恐れ、持ち込まない** 外来種（特定外来生物のオオハンゴンソウ等）を広げないよう、アウトドアに出掛ける前には靴底の泥を落とす等の基本を徹底しましょう。

生物多様性の危機は、遠い世界の話ではありません。まずは足元の自然の「機能」と「現状」を正しく知ること。それが、信州の豊かな自然を未来へつなぐ第一歩です。

（高野 宏平／自然環境部）

**写真** 夏季には多くの訪問客があり、冬季にはファミリー向けのスキー場が開設される霧ヶ峰。縄文時代から野焼きによって半自然草原が維持されてきたと考えられているが、野焼きの停止により森林化が進んでおり、貴重な草原生態系の維持が課題になっている。

## 1. 人間活動の増大

- ササユリ等の貴重な動植物が、観賞目的で**採取**され数が減少
- 多くの登山者によって、道沿いの植物が**踏みつけ**られる被害

## 2. 人の関わりの減少

- 牧畜や屋根に草が**利用**されなくなったことで草原がなくなり樹林化
- 狩猟者減少に伴う**シカ**増加で農作物や高山植物の**食害**増

## 3. 外来種の増加

- 外来植物の繁茂による在来種の**被圧**
- ブラックバスによる**漁業被害**やヤゴ等の水生生物の**捕食**
- オオサンショウウオとチュウゴクオオサンショウウオの**交雑**

## 4. 地球環境の変化

- 温暖化により、ライチョウ等の**生息適地**が**縮小**
- 温度変化により、**花の咲く時期**や**実のなる時期**が、**送粉者**や**種子散布者**の**活動時期**と**ずれる可能性**

日本の生物多様性を脅かす4つの危機





## 中山間地における生物多様性の活用と可能性

日本各地で受け継がれてきた伝統的な農林業活動を中心とする「里山暮らし」の消失に伴い、里山における生物多様性の損失が進行しています。これを防ぐため、里山暮らしの継承や再生が望まれるものの、人口減少時代に突入した我が国において、消失しつつある暮らしの再生は難しいのが現状です。一方で近年、持続可能なライフスタイルに対する市民の関心が世界的に高まりつつあります。里山暮らしの生物多様性保全効果に着目し、その価値を広めることが、里山暮らしの復権と、里山生態系の継承・再生につながる可能性があります。

国土の約7割を占める中山間地域で営まれてきた農林業を中心とする人の営みは、里山景観の豊かな生物相を育み、国土の保全にも貢献してきました。しかし、高度成長期以降、里山で続けられてきた伝統的な活動（暮らし・生業）が消失し、それにより維持されてきた生物多様性や生態系サービスが失われつつあります。このような人の働きかけの縮小による生態系の劣化を、「生物多様性第2の危機」として生物多様性国家戦略で言及して20余年、人口減少社会を迎え、2050年までに国土の5割超が無居住化すると予測される状況下において、この状況が改善される兆しはありません。健全な里山生態系を次世代に引き継ぐための有効な策はないのでしょうか。

好機の一つとして考えられるのが、持続可能なライフスタイルへの関心の高まりです。持続可能な開発目標（SDGs）の認知度の向上に伴い、我が国においても持続可能な企業や商品を支持する市民の割合が7割

近くに達しています。ヨーロッパやアジアをはじめとする諸外国においても、環境に配慮した購買行動を起こす市民が増えています。令和4年（2022年）には、持続可能な食料システム構築に向けた「みどりの食料システム戦略」が策定され、環境にやさしい農業経営をはじめとする事業者の持続性確保に向けた努力と工夫に対する理解を深め、持続性を重視した消費を拡大することが目指されるようになりました。

この流れは、その土地の風土の中で培われてきた自然資源と伝統知を活用してきた里山暮らしにとってはチャンスです。世界的に持続可能な農林業への関心が高まる現在、里山で営まれてきた農林業が、その生産活動を通じて生物多様性を育み、保全に寄与してきたことを示すことの訴求効果は大きいと考えられます。

里山暮らしの生物多様性保全効果に焦点を置いたブランド化の事例として、世界農業遺産に認定された「静岡の茶草場農法」があります。ここでは、「トキ」や「コウノトリ」などの生き物を「売り」にするのではなく、茶葉生産に伴う、「草地の管理」という活動の生物多様性保全効果を「売り」にすることで、年間15億円を売り上げています。

持続可能な取り組みに対する市民の選好が見込まれる社会においては、里山暮らしの生物多様性保全効果や、文化的・歴史的な価値を広めることで、里山暮らしを生業として選択し、受け継ぐことのできる社会を実現できるかもしれません。（小林 慶子／自然環境部）

写真1 里山の生態系維持に役立っている。草を刈り、利用することは、



認定区分	認定表示
5～25%未満	
25～50%未満	
50%以上	



図 静岡の茶草場農法実践者認定制度で用いられる認定区分と認定表示。経営する茶園面積に対する茶草場（草地）管理面積を、生物多様性保全貢献度として示している。



写真2 適度に草刈りをされる田んぼのあぜに絶滅危惧種のキキョウが咲く（長野県泰阜村）



## 長野県生物多様性センターが開設されました ～自然と未来をつなぐ新たな拠点～

気候変動や土地利用の変化が進むなか、世界では生物多様性の損失が深刻な課題となっています。2022年には国際的な世界目標「昆明・モントリオール生物多様性枠組」が採択され、自然の損失を止め回復へと向かわせる「ネイチャーポジティブ」や、陸域・海域の30%以上を効果的に保全する「30 by 30」が掲げられました。

こうした流れを受け、日本では2025年4月に「地域生物多様性増進法」が施行され、地域における多様な主体の連携と保全活動を後押しする仕組みが新たに整備されました。

長野県は、豊かな自然が育む多様な生態系を未来へ引き継ぐため、この新法に基づき、2025年12月16日に「長野県生物多様性センター」を開設しました。県生物多様性センターは、県庁自然保護課と環境保全研究所飯綱庁舎に設置され、中間支援組織として県内の活動をつなぎ、支え、広げていく役割を担います。このセンターは、企業や団体、市町村など幅広い主体



生物多様性保全パートナーシップ協定延長締結式  
(ミヤマ株式会社とミヤマジミ研究会)

の連携と協働を促す拠点として、関係者間の連携や協力のあっせん、有識者の紹介、科学的知見の収集・分析・整理などの基本業務に加え、国が認定する「自然共生サイト」への申請支援、市町村による地域戦略や連携増進活動実施計画の策定支援、企業と保全団体をつなぐ「生物多様性保全パートナーシップ協定」の締結促進などに取り組みます。

また、情報発信として、生物多様性ポータルサイト「信州いきものがたり」を通じて、県内の自然の魅力や保全活動、研究成果を紹介。県民が生物多様性の保全を社会経済活動において考慮し、行動に反映する「生物多様性の主流化」を実践するきっかけづくりにも取り組みます。

長野県の自然は、暮らしや文化、地域経済を支える大切な財産です。県生物多様性センターは、県民・企業・自治体・研究者など多様な主体とともに、ネイチャーポジティブの実現に向けた県全体の取り組みを力強く進めていきます。 (更級 裕一郎/自然保護課)



長野県生物多様性センターの開所式  
(環境保全研究所飯綱庁舎)

## 生物多様性ポータルサイト「信州いきものがたり」のご紹介

信州の自然や生きものについて知りたい方に向けて、基礎知識から地域の特色、ホットスポット、直面する危機までをわかりやすくまとめたポータルサイト「信州いきものがたり」。生物多様性を学べるページのほか、生き物クイズをはじめとした子ども向けコンテンツや、県内で開催される関連イベントの情報も掲載しています。信州の生物多様性の理解を深める一助として、ぜひご利用ください。



生物多様性ポータルサイト「信州いきものがたり」  
<https://www.shinshu-ikimono.pref.nagano.lg.jp/>

Report

令和7年度(2025年度)信州自然講座(通算31回)  
「開田高原の生物多様性と人の暮らし」開催報告

日時：2025年11月15日(土) 13:00～16:00  
会場：木曾町文化交流センター多目的ホール  
参加者：60名  
共催：木曾町、エコネットきそ(木曾町環境協議会)  
後援：環境省信越自然環境事務所



写真1 講演の様子

全国の中山間地で里山の自然や文化の継承が課題となる中、里山で育まれてきた自然や文化の魅力はどう活かし次世代につないでいくか、数千年にわたる人の暮らしによって形作られた自然と文化が根付く開田高原を例に参加者のみなさまと考えました。

講演では開田高原の歴史と文化、生物多様性、木曾馬との暮らし、自然に対する住民意識、木曾馬について5名の演者が紹介しました。また、県内10団体が環境保全の取組を紹介する展示を行いました。参加者のみなさまには、講演や展示

の内容をふまえて、草地や木曾馬を活かした地域づくりへの提案をいただきました。意見交換会では、地域づくりに関する魅力的なアイデアが多数あがり、開田高原の人の暮らしが育む自然の持つ可能性が示されました。

当日は、木曾町をはじめとする県内の他、兵庫、東京、愛知など県外からも多くの方にご参加いただき、議論を深めることができました。今回の信州自然講座を共催し、準備や展示へのご協力をいただきました木曾町とエコネットきそ(木曾町環境協議会)のみなさま、後援をいただき、展示にもご参加くださいました環境省信越自然環境事務所みなさまに、心より御礼申し上げます。(小林 慶子/自然環境部)



写真2 展示の様子



写真3 意見交換会の様子

【講演内容】

- 開田高原の生物多様性をはぐくんできた歴史と文化  
(浦山佳恵/長野県環境保全研究所)
- 開田高原の人の暮らしが育む生物多様性(中村寛志/信州大学)
- 花野で草を刈る木曾馬との暮らし(田澤佳子/ニゴと草カッパの会)
- 開田高原の草地環境に対する住民の意識  
(畑中健一郎/長野県環境保全研究所)
- 木曾馬とはどのような馬なんだろう?(高須正規/岐阜大学・岡山大学)

【展示参加団体】

- 木曾町環境協議会(エコネットきそ)・株式会社光商会
- 認定特定非営利活動法人長野県NPOセンター
- 環境省信越自然環境事務所
- NPO法人信州草原再生
- 山田牧場を愛する会
- (一社)木曾おんたけ観光局
- 長野県木曾地域振興局総務管理・環境課
- わかぜん
- 名古屋大学博物館
- ニゴと草カッパの会

【意見交換会で出たアイデア(例)】

- 開田高原の魅力を感じて関係人口を増やす：木曾馬体験施設を併設した馬糞堆肥を活用した一大農耕地開発、木曾馬競馬や木曾馬で峠を越す旅などの体験型商品の開発、木曾馬と暮らす現代風モデルハウスの設置
- 担い手の確保、次世代への継承(他地域との共通課題)：地元中学校などと連携を強化し学生を巻き込む

より詳しい情報は当所HP(<https://www.pref.nagano.lg.jp/kanken/jisseki/koza/theme/kusyukoryu2025.html#shizenkoza>)でご確認ください。



## 山と自然のサイエンスカフェを終えて

Report

日時：2026年2月13日(金)

17:30～19:00

会場：くらしふと信州(オンライン参加併用)

参加者：48名(対面、オンライン参加合計)



▲▼山カフェの実会場の様子



ボランティアによって実施されている火打山におけるライチョウの生息環境改善事業の様子

「ライチョウ保全に登山者ができること」というタイトルで、第67回山と自然のサイエンスカフェを実施しました。くらしふと信州を会場として対面のみで実施した昨年度のサイエンスカフェでは、長野市在住の方を中心にご参加いただいていた。しかし、今回は対面とオンラインの併用(ハイブリッド)方式にすることで、中信や南信地域、さらには関東地方や北海道等県外から、最終的には対面12名・オンライン36名の合計48名と、多くの方にご参加いただきました。

講演はいくつかのセクションに分けながらその都度質問に答える形式で進めました。尾関主任研究員による軽快な司会進行で、オンライン参加の方からも、チャットを中心に多くの質問をいただくことができました。こちらから一方的に話し続け最後に質疑を行う講演形式とは異なり、参加者と双方向にコミュニケーションを取りながら進むのはサイエンスカフェならではの実感しました。ライチョウの基本的な生態から、私が過去に取り組んできた研究や、研究所に着任してから実施してきたこと、そして参加者の皆様と共有したかった課題感。どこまでうまく伝えられたかわかりませんが、話題提供者としても新たな気づきを得ることができ、充実した会となりました。

今回の大きなテーマはタイトルの通り登山者が如何にライチョウ保全に関わることができるかでした。例えば高山という非常にアクセスの困難な場所に生息するライチョウの生息状況を把握するために登山者が果たす役割は大きくなっています。かつては報告者側も写真を現像したり、観察場所を記述したデータを郵送又はメールしたりと大きな手間がかかっていましたが、テクノロジーの進歩により効率的かつ科学的にも信用性の高いデータを収集できるようになってきています。これからは登山者が収集したライチョウの情報が、保全の基礎データとなる未来が近づいていることを紹介しました。だからこそ、今後は登山者の振る舞い(ライチョウの観察や登山のルール徹底)が重要になってきます。

次回以降もハイブリッド方式を継続するかはまだわかりませんが、遠方からも参加しやすいのは大きな利点です。今回の反省点も生かし、開催方法を検討します。最後になりましたが、参加いただいた皆様には、この場を借りて御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

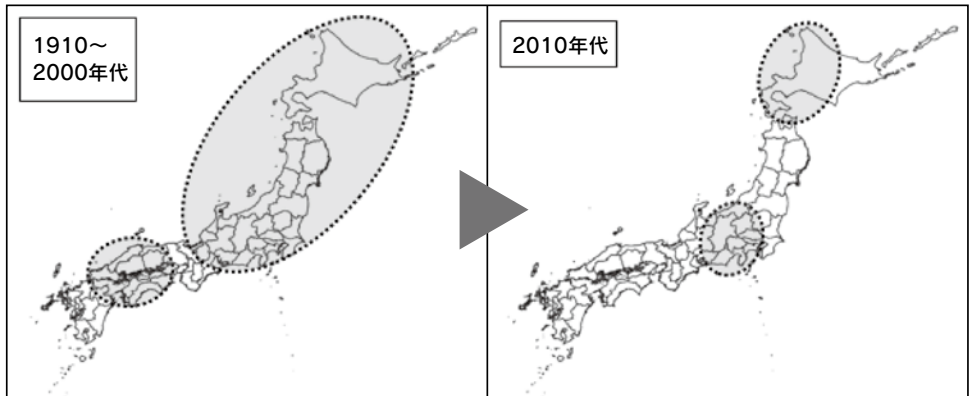
(小林 篤/自然環境部)

## 長野県で開始される 渡り鳥アカモズの保全



アカモズ（亜種アカモズ）は夏鳥として5月頃日本に渡来し、繁殖後の9月頃に東南アジア方面に飛去する渡り鳥です。かつて本種は東日本を中心に広く生息していましたが、過去100年間で分布域は1割以下に減少し、2019年時点では北海道、長野県、山梨県のみで確認されるのみとなりました。中でも長野県は本州に残された最後の大規模な生息地です。2019年時点で全国の総個体数が約300個体と推定されているうち200個体程度が長野県に生息するとされていましたが、2025年現在は100個体程度まで減少しています。

この鳥は渡り鳥であるため、減少の要因は国内の問題だけでなく、海外の越冬地も大きく影響していると考えられており、明確な減少要因は明らかになっていません。一方、長野県ではわずかに残された繁殖地での卵やヒナの捕食等による繁殖率の低下がさらなる個体数の減少を引き起こしていることが指摘されており、保全事業が必要になっています。



アカモズの生息箇所の変化 (Kitazawa et al. 2021 を参考に作成)

県内では個体数が多かった際には丘陵地、低山地の明るい林、まばらに木の生えた草原や善光寺等の市街地といった幅広い環境に生息していました。しかし、個体数が減少してからは中中信地方のリンゴやブドウ等の果樹園に集中して生息していることが確認されました。北海道や山梨に残った繁殖集団は疎林や草原等に生息しているので、長野県では人が管理する果樹園に生息する点が大きな特徴となっています。

**アカモズの 巣を  
落とさないで！！**  
絶滅危惧種の鳥が生息しています

●見つけたときはそのままに！

果樹園で見られる主な鳥の巣

ムクドリ

・果樹園で見かける鳥の巣は、ほとんどがアカモズ、モズ、カワラヒワの巣です。このうち、アカモズは国内希少野生動物種に指定されています。これらの鳥のす食は巣出や早の種であり、リンゴを食ついたり糞をたたりすることはありません。

・リンゴを食ってしまうムクドリは果樹には巣を造らず、建物の隙間などに巣を造ります。また、ムクドリはアカモズと同じ鳥類ですが、同じ林や果樹に巣を造ることが多く、果樹園にはあまり巣を造りません。

皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

※アカモズは国内希少野生動物種に指定されています。【鳥獣保護管理法】第21条（希少野生動物種）に定められています。

個体数の減少が明らかになったことから、環境省では2021年に国内希少野生動物種に指定し、県内の関係者との保全を進めていました。長野県においても2025年に長野県希少野生動物種保護条例に基づく特別指定希少野生動物種（21種目）に指定し保護を図り、今年度末までには本種の保護回復事業計画の策定を目指しています。環境省では法定計画に基づく保全活動は実施されていないため、今後、県内のアカモズ保全については長野県の関わり方が重要になってきます。

現在県内では人間環境大学、信州大学、長野アカモズ保全研究グループ、自治体関係者等により様々な保全策が進められています。例えば、アカモズの巣を捕食から守るための捕食者対策、全県を対象にしたモニタリング、巣が人的に落とされることを防ぐための農家への普及啓発、カメラマンへの呼びかけ等です。また、2022年には日本動物園水族館協会と連携し世界で初めてアカモズの飼育も開始され、野生復帰に向けた準備も進められています。既に一定程度事業が進む中での県の保護回復事業計画の立ち上げとなりますが、関係者とうまく連携を取り、アカモズの保全の実現に向けて多くの方にご協力いただきながら一歩一歩取り組んでいければと考えています。

アカモズの生息地周辺の農家に配布している普及啓発チラシ

(小林 篤／自然環境部)

## 信州気候変動適応センター通信 No.8

## 放置竹林と気候変動

## —「ゼロカーボンミーティング in 佐久」に協力しました

2025年12月15日、佐久合同庁舎にて「ゼロカーボンミーティング in 佐久～竹林増加の影響から佐久地域の気候変動を考える～」が開催され、信州気候変動適応センターも展示や講演で協力しました。当日は約50名の参加者が集まり、地域の課題である「放置竹林」を切り口に、気候変動への適応と緩和について多角的な議論が行われました。

## 身近な「適応」としての竹林対策

竹は年に数メートルの速度で広がる能力があるため、放置すれば里山や河畔林が竹林に置き換わり、生物多様性や土地管理に影響が及びます。適応センタースタッフ（高野）の講演では、竹林は①外来種（ハチクやモウソウチク等のマダケ属は国が産業管理外来種\*に指定）、②人口減少等に起因する管理放棄に加え、③気候変動による生育適地の拡大（図1）という「複合問題」であることを指摘しました。講演では、人口減少を見据え、地域の余力があるうちに「残す竹林」と「手じまいする竹林」を選別し、100年後にどのような地域にしたいかを考える「適応策」としての検討を提案しました。

## 「緩和」と「自分事化」の両輪で

気候変動対策には、こうした影響に備える「適応」と同時に、原因となる温室効果ガスを減らす「緩和」が不可欠です。長野県地球温暖化防止活動推進員の鈴木智子氏による講演「気候変動 わたしたちにできること」では、国際的な枠組みの話にとどまらず、松本市の気候市民会議の事例などを交え、個人のライフスタイル転換がいかに重要かが語られました。また、県環境部ゼロカーボン推進課からは「2050ゼロカーボンの実現に向けた県の取組」として、省エネ家電やソー



写真 会場では竹林活用の展示やCO<sub>2</sub>の重さ体験も行われ、活発な情報交換がなされた。

ラー普及などの緊急支援事業や、2050年のゴールを見据えたロードマップが提示されました。

## 地域資源としての活用と未来

会場では、竹林問題を前向きな「活用」で解決しようとする動きも紹介されました。佐久地域で活動する団体「ミルプロット」によるブース展示（写真1奥）では、厄介者扱いされがちな竹を「淡竹（はちく）パウダー」として資源化する取り組みや、楽しみながら課題解決を図る活動の様子が共有され、多くの参加者が足を止めていました。竹林問題は、まさに目に見える「身近な気候変動」です。今回のミーティングは、行政・研究機関・市民団体がそれぞれの知見を共有し、地域の自然を守るために「今、何ができるか」を共に考える貴重な機会となりました。

（高野 宏平／自然環境部）

\*産業又は公益性において重要で、代替性がなく、その利用にあたっては適切な管理が必要な外来種

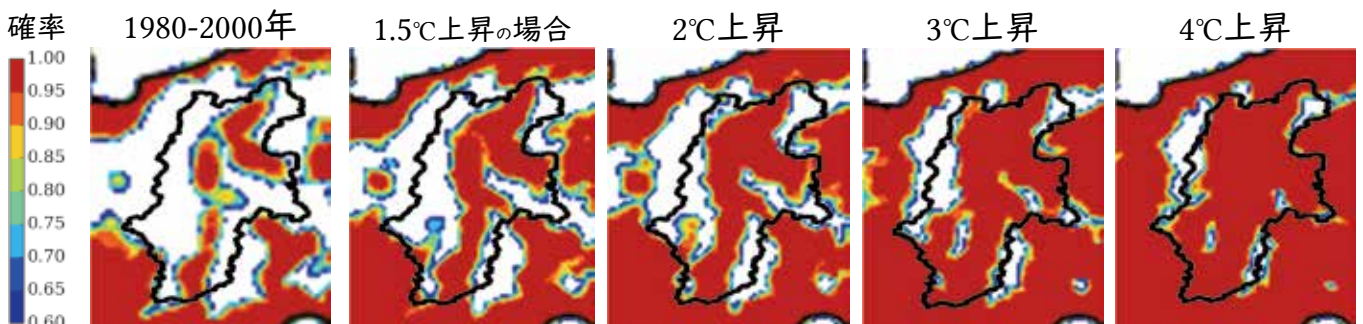


図1 長野県における竹林の生育に適した環境の将来予測  
現在（左上）と比較し、気温が上昇（右へ移行）するにつれ、赤色で示される「生育に適したエリア」が県全域、特に標高の高い地域へと拡大する予測が示されている（Takano et al. 2017 をもとに作成）。



## 令和8年度のイベント予定



ホームページは  
こちらから↑

詳細は、開催1ヶ月前までにホームページ等でお知らせします。  
最新情報を当所のホームページでご確認ください。  
(<https://www.pref.nagano.lg.jp/kanken>)

### ◎自然ふれあい講座

## みんなで温暖化ウオッチ ～セミの抜け殻をさがせ！

毎年同じ時期に同じ場所でセミのぬけがらの種類や数を調べることで自然の変化を観察します。平成24年(2012年)度から継続中で、令和8年(2026年)度は次の6会場で開催します。

#### ▶時期

8月3日(月)～8月8日(土)(午前中)  
会場ごとに開催日は異なります。

#### ▶場所

- ・川中島古戦場史跡公園(長野市)
- ・アルプス公園(松本市)
- ・かざこ子どもの森公園(飯田市)
- ・市立大町山岳博物館(大町市)
- ・市民の森公園(上田市)
- ・鳩吹公園(伊那市)



★この他にも、「サイエンスカフェ」「施設公開・親子環境講座」等の開催を計画しています。詳細はホームページで！



## 長野県生物多様性センター通信

No.1

今号の特集では、長野県に新しく生まれた「生物多様性センター」を軸に、データで示す“守るべき場所”、現場で進む“守り方”、そして地域の文化・暮らしとのつながりを見渡しました。

2026年は世界的に重要な節目の年でもあります。本年開催されるCOP17(第17回生物多様性条約締約国会議)では、2030年目標(昆明・モントリオール生物多様性枠組)に対する各国の進捗が世界規模で評価されます。日本でも国別報告書の作成や生物多様性国家戦略の点検が進んでおり、今の私たちの行動が2030年の到達点を左右します。



こうした動きを“自分ごと”に引き寄せる鍵の一つが、Nature-based Solutions(NBS)です。NBSは、自然の仕組みをいかして社会課題を解決する考え方で、都市や集落では、暑さ対策・雨水対策・景観形成と生物多様性保全を同時に実現する“グリーンインフラ”として広がりつつあります。身近な公園の植生管理や、集落の水辺・斜面の保全、学校や企業での緑地づくりなど、小さな取り組みが“自然を増やしながらか暮らしを守る”手段にもなり得ます。

また、企業や金融の世界でも、ネイチャーポジティブ経済への移行が本格化しています。自然資本の見える化や情報開示の動きが進む中、地域と企業・団体が協働する場づくりが、長野県の強みを支える重要な土台となるでしょう。



センター開設は“ゴール”ではなく“入り口”です。自然とともにある信州の暮らしそのものが、未来を形づくる大きな力です。身近な自然に気づく・参加する・語り合う。その一步一步が、信州の豊かな自然を守り育てていくことにつながるはずです。  
(高野 宏平・黒江 美紗子・小林 篤/自然環境部)

